



写真甲子園

33rd National High School
Photography Championships 2026

仲間と挑む夢の舞台
目指せ、高校写真部の日本一！



写真甲子園 2026 レポート

今年で33回目を迎える全国高等学校写真選手権大会「写真甲子園2026」が、2026年7月28日から31日の4日間にわたって北海道東川町とその周辺で繰り広げられた。その熱戦の模様をレポートする。



東川町

北海道・東川町は1985年に世界初の「写真の町」を宣言。写真甲子園の運営も行なう。



出場する各校には、キヤノンマーケティングジャパンからEOS RPとRF24～105ミリF4-7.1 IS STMを3セット、さらにRF24～240ミリF4-6.3 IS USM、RF35ミリF1.8 MACRO IS STM、スピードライトなどが貸与される。

はどの高校か。
想される。果たして栄冠をつかむのはどの高校か。
勝ち抜き、本戦の地「写真の町」北海道東川町に辿り着いたのは18校54名の選手（生徒）たち。初出場が7校を数える一方、優勝経験校や常連校も多く、例年になく熱い戦いが予想される。果たして栄冠をつかむのはどの高校か。

そこからは全国11ブロックの予選を勝ち抜き、本戦の地「写真の町」北海道東川町に辿り着いたのは18校54名の選手（生徒）たち。初出場が7校を数える一方、優勝経験校や常連校も多く、例年になく熱い戦いが予想される。果たして栄冠をつかむのはどの高校か。

激しい予選を勝ち抜いた
18校が写真の町に集結

高校写真部にとって、新年度のスタートは写真甲子園への始まりでもある。予選作品の応募は1校1作品で、締切は5月中旬。それまでに3名からなるチームを結成し、6～8枚の組写真を完成させなければならない。前年度から撮影をする高校も珍しくないが、一方で4月になってから急造したチームで本戦まで進む高校もある。今年の予選参加は40校。全国各地で40もの苦悩や格闘があった。

写真の総合力が問われる! 4日間の写真バトル

2日目 (7月29日)

- 第1ステージ
- 第2ステージ
- セレクト会議①

元気なクワガタを見つけ、一気に撮影モードに入る選手たち。

1st 上富良野町

なだらかな丘が続く北海道らしい景色の中、撮影がスタート。しかし、麦畑に人影はほとんどなし。写真甲子園の洗礼は、まず北海道の広さに圧倒されることなのだ。



2nd 東神楽町

田園地帯の東神楽町。雨の予報だったが、薄曇りで撮り歩くには絶好のコンディション。撮影エリアには東神楽町役場が含まれており、職員や来庁者が次々と選手たちのモデルになっていた。



セレクト会議

2日目の夕方と最終4日目の昼、各2時間行なわれる。途中20分間が監督も自由に指示や助言ができるテクニカルタイム。取材陣が入れるのもこの時間だけ。

**朝から夜まで写真漬け
まさに写真はスポーツ**

設定された撮影ステージは、大会2日目から4日目（最終日）までで計5回。しかし、カメラを渡される開会式前から撮影自体はいつでも可能だ。今年も夜間や早朝に撮影された作品が目立つなど、体育会のようなタフさも必要となる。

一方、1回2時間、計2回あるセレクト会議の途中、20分間だけ監督は自由にアドバイスができる。それまでに選手はアイデアや候補作を用意する必要があり、撮影以上に勝敗を分けるポイントともいえる。

1日目 (7月28日)

- 開会式
- 歓迎夕食会
- ホームステイ

開会式

今大会から主会場が元小学校をリノベーションした文化複合施設「せんとびゅあ」に移転。北海道札幌琴似工業高等学校の佐藤心羅さんが選手宣誓を務めた。

歓迎夕食会

今晚お世話になるホストファミリーとここで対面。そして、ジンギスカンで大事な燃料補給。



ホームステイ

初日の夜は、18校がそれぞれ東川町内の一般家庭でホームステイ。翌朝までが人物やスナップを撮る絶好のチャンスとなる。



セレクト会議では、各校ごとにPCとキヤノンPIXUS PRO-S1 Mark IIが用意される。候補作品は好きなだけ2Lに、そして提出作品はA4に所定のフォーマットでプリント。ともにプラチナグレードの高光沢紙Photo Paper Pro。

**チームワークと自主性が
写真の技術以上に大切**

写真甲子園のユニークな点は団体戦であること、イコールコンディションが徹底され、競技的要素もあること。撮影場所や使用機材、セレクト作業などは厳密にルールが定められている。とりわけ特徴的なのが、監督（顧問）は選手への指示や助言のほか、カメラ操作や覗く行為も禁止されていること。選手たちはかに自分たちで考え、行動するかが問われる。



撮る力、選ぶ力、伝える力—— 同じ条件で競い合う



4日目 (7月31日)



5th 東川町

最終ステージは「せんとびゅあ」で午前10時というゴールのみが設定されている。夜明けとともに動く選手も多く、初日のホストファミリーを再訪する学校も。泣いても笑ってもこれで撮影は終了だ。

- 第5ステージ
- セレクト会議②
- ファイナル公開審査会
- 表彰式



公開審査会

3日目午前と4日目午後の2回行なわれる公開審査会では、クジ引きで決まった順番に2校ずつ作品を発表。



作品の投影前にはプレゼンテーションが。当然ながら、これも審査結果を左右する。



野村恵子さん、鶴川真由子さん、浅田政志さん、GOTO AKIさん、小高美穂さんの審査委員5名がディスカッション形式で厳しくも温かい講評を行なう。

表彰式

ドキドキの結果発表。計4つある特別賞のうち、3つを生野高校が獲得。3回目に高校名が読み上げられたときは、会場内にどよめきが起こった。



詳細な大会レポートは
こちらをご覧ください。



3日目 (7月30日)



3th 旭川市内

ほかのステージでは巡回バスが出るが、ここは徒歩で各自好きな場所へ。旭川駅南側のスタート・ゴール地点から、ほとんどの選手が駅北側の繁華街へ向かった。



道行く人に声を掛けて撮らせてもらう姿も目立った。



4th 東川町

東川町の夕焼けは本当に美しい。それを撮ってもらおうというステージだが、あいにくの曇りとときどき雨。認定こども園が撮影可能になっており、そちらへ向かう選手たちも。



写真の町らしく、町内各所に写真が掲示されている。

機材メンテナンス

選手たちが撮影を終えて夕食をとる間、キヤノンマーケティングジャパンの修理スタッフが預かった機材をメンテナンス。その手際の良さはまさに職人技！

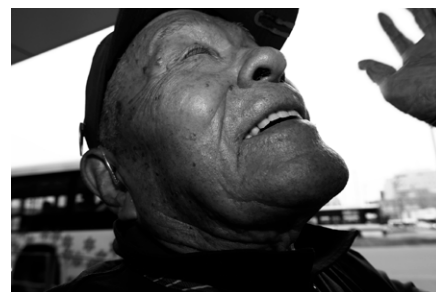


作品をプレゼンする公開審査会は、3日目と4日目の計2回。それぞれ8枚組の作品と自分たちの言葉で臨む。写真のプロフェッショナルである審査委員たちがジャッジするのは「心・技・眼」の3点。上手な写真を撮ればよいわけではなく、意図を的確に表現する技術も求められる。今大会は晴れ間が少なかったぶん日中は涼しく、さらに光が柔らかいというメリットもあった。強い日差しや影は写真をドラマチックに仕上げるが、一方で露出の判断が難しくなる。撮影後のレタッチはできないが、どの高校もその失敗はなかった。

優勝

町民が選ぶ特別賞(ファースト)

和歌山県立 神島高等学校



ファイナル公開審査会
「未来の記憶」



左から恵納崇監督、
選手の太田斗真さん、
山根楓さん、
キャプテンの濱本
海里さん。



作品講評

神島高校の写真部員たちは放課後になるとグラウンドで運動部の練習を撮影。光や動きの捉え方などを体に叩き込んでいる。代表審査委員の野村恵子さんは、その日ごろの努力がもたらす力量や熱量を評価。「ファイナルだけを見れば激戦でしたが、神島はファーストからハイレベルでした」と選評を語っていた。

岐阜県立 岐阜総合学園高等学校

選手／今津万由、杉野希帆、岩田優花
監督／加藤春子

同志社女子高等学校(京都府)

選手／河村優奈、小上馬杏南、岩本虹子
監督／古谷直子

出雲北陵高等学校(島根県)

選手／勝部紫帆、景山双葉、原宗右介
監督／村上学

愛媛県立 今治南高等学校

選手／丸山煌希、野村裕里加、竹田姫花
監督／安野博之

茨城県立 笠間高等学校

選手／戸井田美空、程山朱珠、川澄朋哉
監督／栗田成美

アレセイア湘南高等学校(神奈川県)

選手／廣澤零、鈴木千晶、倉嶋さくら
監督／井之脇祐太

神奈川県立 逗子葉山高等学校

選手／岩崎恵大、浅見直人、大杖琴寧
監督／鬼頭志帆

藤ノ花女子高等学校(愛知県)

選手／小林うらら、田原志織、夏目麻衣
監督／渡辺洸太

敢闘賞

北海道札幌琴似工業高等学校

選手／山内陽斗、元木勇舞、佐藤心羅
監督／河原勇滋

福島県立 安積黎明高等学校

選手／磯野有里那、菅澤麗、富岡紗久
監督／藤井克憲

群馬県立 富岡実業高等学校

選手／小須田湊駄、田村瑠唯、木島謙心
監督／栗原佳

準優勝

町民が選ぶ特別賞(ファイナル)／選手監督が選ぶ特別賞
大阪府立 生野高等学校



「愛」

選手／中野葵、山田美咲、山口優月
監督／加藤真由

キャノンスピリット賞

撮影：中野葵さん

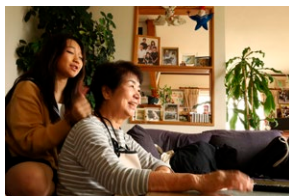


優秀賞

トキワ松学園高等学校(東京都)

「ちぢまる」

選手／福永圭桃
鈴木柚葉
小林千紘
監督／田中啓太



沖縄県立 浦添工業高等学校

「ちちん
ぶいぶいっ」

選手／服部菜奈
幸地今梨
國場かれん
監督／新垣隆吾



八代白百合学園高等学校(熊本県)
「北の大地で生きる～第二章、これから～」

選手／若狭奈央
吉永花音
荒坂真妃
監督／中西琢也



福井県立
丹生高等学校
「あなたの
そばにも」

選手／坂本リ工
磯野来未
京谷実咲
監督／竹内祐子



東京都立
総合芸術高等学校
「あのときの
わたしは」

選手／中村灯里
堺美緒
土方夕来
監督／朝川千鏡



大会の結果や各校の作品は、
左のQRコードから閲覧できます。



取材後記

「写真甲子園」取材歴20年以上
写真家・鹿野貴司



積極果敢な表現に
新しい「写甲」を見た

今回の写真甲子園は、演出をして作品を作り上げる高校と、人物や風景をストレートに切り取る高校、大きく2つのスタイルに分かれた。演出をした作品は、以前なら「北海道じゃなくても撮れる」と否定されることも多かった。しかし、昨年の中越高校(新潟)は出会ったお年寄りに高校の制服を着てもらうという大胆な演出で優勝。それが写真甲子園に新しい流れを生んだ。今大会ではトキワ松学園と丹生が巧みな演出を評価され、ともに優秀賞を獲得した。

一方で優勝した神島、準優勝の生野はともにストレートな作風。演出写真に比べれば古典的に見られがちだが、両校とも一枚一枚の写真に力があり、それを組写真に構成する眼も持っていた。演出写真もストレートな写真も同じ土俵で等しく評価されるのが、写真甲子園の懐の深さだとあらためて感じさせられた。

そして、開会式直後に熊本地震が発生し、八代白百合学園は地元が大きな被害を受けた。そんな状況でも選手たちは明るく温かいスナップを撮影。3人が写真の力をかみしめているのが作品から伝わってきた。